

小田浦窯跡群 2 (79地点の調査)

大野城市教育委員会



3号窯(左)と4号窯(右)

小田浦窯跡群79地点は月ノ浦4丁目と平野台4丁目の住宅街に挟まれた山の斜面に位置します。ここは九州最大の須恵器を焼くための窯跡群である「牛頭窯跡群」の一角にあたります。

この山の斜面で、平成16年秋から平成17年春にかけて、発掘調査をおこなった結果、古墳時代の終わり頃から飛鳥時代の窯跡が4基も並ぶように見つかりました。この辺りは約1400年前の須恵器生産の中心的な場所であったようで、様々なことがわかってきました。

4基の窯跡は、いずれも山の斜面をトンネル状に掘り抜いた「地下式窯(登り窯)」でした。このうち1基(3号窯)を詳しく発掘調査しました。

窯の大きさと構造 この3号窯は長さ11.7m、幅2.3mと規模が大きく、窯の構造も興味深いものでした。特に、「多孔式煙道」と呼ばれる煙を出す部分が見つかったことは貴重な成果といえます。多



上空から見たようす



窯の中のようす



煙道近くのようす



煙道の一部(柱のような石)



少ししか焼けていない須恵器

孔式煙道とは、一般的な窯跡が、煙を1つの大きな煙突(煙道)から出すのに対し、いくつも小形の煙突をつくり、そこから煙を出す構造のことをいいます。火を焚く時、小形の煙突を開けたり閉めたりすることによって炎の流れを変化させ、窯の中の温度調整をしていたものと考えられ、全国的に見ても牛頸窯跡群の特色として注目されています。

なお、今回調査した3号窯は、崩れてわかりにくくなっていますが、写真のとおり柱のような形の石と粘土を組み合わせ、5つの煙突(煙道)を持っていたことがわかりました。

またこの窯は、補修・改修しながら何度も使っていたようで、窯の大きさも、改修するうちに短く作り直した痕があり、元々は14mを超える大変大きな窯であったと考えられます。

当時、これだけ大きな窯を作るのは大変な作業でしょうから、何度も何度も繰り返し使用し、壊れれば補修・改修を行なったのでしょう。当時の工人(職人)達の苦勞の跡がうかがえます。

出土遺物 窯跡からは、6世紀末～7世紀前半(古墳時代終わり～飛鳥時代)の須恵器が数多く出土しました。通常の須恵器は硬く焼けしまり、灰色になっていますが、この窯から出土した須恵器の中には、少ししか焼けていない黄土色でやわらかい須恵器も出土しました。この黄土色の須恵器の一部は、窯の床に置かれるようにして発見され、その上には天井の土が覆っていました。こうしたことから、最終的にこの窯は、須恵器を焼き始めて間もなく天井が崩れ、使えなくなったのではないかと推測できます。

また、3号窯の近くの別の窯からは、須恵器に混じって、たくさんの瓦が見つかりました。当時は日本で瓦を生産し始めて間もない頃で、一部のお寺や役所のような非常に限られた場所

でしか使用されていませんでした。大変貴重な発見といえますが、大宰府に政庁もできていなかった当時、ここで焼かれた瓦はどこに運ばれたのでしょうか、今後の課題といえるでしょう。(2005.8)